

第 13 回高齢者社会福祉施設の防火研修会 概要報告

主題：『高齢者施設の夜間の火災安全確保について考える』

日時：平成 28 年 5 月 16 日 13：30～17：00

場所：長岡市千歳 1 丁目 3 番 100 号 長岡市消防本部 4 階研修室

主催：特定非営利活動法人 日本防火技術者協会

共催：長岡市消防本部

長岡市社会福祉協議会

参加者：施設関係者：56 名＋長岡市消防：10 名

防火技術者協会 小林，富松，大西，栗岡，村井，山村

配布資料：1) 研修会資料『高齢者施設の夜間の火災安全確保について考える』

2) 「高齢者福祉施設の夜間火災時の防火・避難マニュアル -特別養護老人ホームを例にして-」、近代消防社

記録：山村

1. はじめに

特定非営利活動法人日本防火技術者協会（以下，防火技術者協会という）は『高齢者施設の夜間の火災安全確保について考える』をテーマに，長岡市消防本部を会場として，第 13 回防火研修会を開催した。

開催に当たり長岡市消防本部ならびに長岡市社会福祉協議会の共催を得た。特別養護老人ホーム等の施設から計 56 名参加し，熱心な聴講と火災図上演習を行った。



2. 防火研修会の主旨

夜間の高齢者施設などの火災で相変わらず多数の死傷者が発生しています。

当協会ではこのような事故が少しでも低減できればと考え，2008 年から研究会を立ち上げて，特に夜間の介護職員が少ない時間帯に火災が発生した場合の避難安全性の確保の方法について取り組んできました。

私たちはこれまで，東京を中心に大阪や名古屋，熊本，札幌などで計 12 回，防火研修会を開催してまいりました。防火研修会では，活動で得られた研究成果や知見を福祉施設関係者の皆様へ還元しています。

また研究成果や知見を一冊にまとめ「高齢者福祉施設の夜間火災時の防火・避難マニュアル」として刊行いたしました。研修会では，上記のマニュアルの要点と共に，火災図上演習（FIG）の解説と演習を実施します。

日々の業務にお忙しいとは存じますが，日ごろ感じている疑問や不安なことをお持ち寄りいただき，一緒に考えてみませんか。

3. 防火研修会プログラム

1) 主題：『高齢者施設の夜間の火災安全確保について考える』

司会：日本福祉大学 准教授 村井 裕樹



2) 開会挨拶（13：30～13：35）長岡市消防本部 消防長 中俣 幸夫

昨年の長岡市の建物火災件数は44件と過去に例のないほどの少なかった。一方で近年、社会福祉施設の火災で多くの人命が失われ、そのたびに法改正が図られてきた。そのために社会福祉施設の現場の職員の業務はより複雑さを増していると思う。

本日の研修を参考にして、日ごろの悩みや疑問点を一つでも解消し、防火管理業務をより良いものにしていただければ幸いである。また本日の研修で得た知識を職場の同僚にも伝えていただき、皆さんの職場の安全性が高まることを期待する。



（13：35～13：40）神戸大学 准教授 大西 一嘉

防火技術者協会は、大学に所属する研究者や企業で働く技術者、行政機関関係者など幅広い職種の者が参加している非営利活動法人である。

今回のような研修会は、過去にも東京や名古屋、米沢など全国様々な地域で開催しており、今回で13回目となる。当初は座学中心であったが、最近は皆さん参加型のワークショップ形式の研修になってきている。

訓練というのは様々なシナリオを考えて定型的に行うが、災害というのはなかなかシナリオ通りにはならない。想定を超えたときにそれに対応する力を身に付けるためには、単に座学で「こういう時にはこうする」と知識を得るだけでは十分でなく、様々な困難な局面においてどうするか？ということ、その都度考える力を身に付けていくことが大事である。その考える力を身に付けるための研修と捉えて欲しい。



3) 「高齢者福祉施設で夜間に火災が発生した時どう対応するか」

(13:40~14:30) 日本防火技術者協会理事 東京理科大学大学院教授 小林 恭一

講演要旨: 高齢者福祉施設の夜間火災発生時の潜在リスク

は大きく、施設関係者も不安を覚えている。しかしどうしたら良いかが分からず、形式的な訓練を繰り返している現状がある。近年 SP や自動火災報知設備（以下、自火報）火災通報装置が防火対象物（6）項口に該当する全ての施設に原則義務付けられ、これらの施設の火災安全性は格段に向上している。各設備を上手く使って個々の施設の特性に合わせた戦略を考え、訓練していけば、火災が起きても被害を最小に食い止めることは可能である。その方法論を「高齢者福祉施設の夜間火災時の防火・避難マニュアル」に記載した。その要点を解説する。



今までの考え方: 「初期消火に失敗したら、入居者を全員無事に避難させることは不可能」との認識が暗黙の了解だった。そのため多くの施設は①とにかく出火しない、②もし出火したら絶対に消火しないとイケない、と考えがちだった。しかし火災に対して正しい知識を持ち、自分たちの施設に備えられた防火の仕組みを理解し、それをベースに戦略を組んで訓練すれば、被害を最小化することはできる。SP 自体は信頼性の高い設備だが、その間に人が何もしなくて良いわけではなく、やるべきことはたくさんある。この観点から「初期消火に失敗した場合」を前提に、どう行動したら良いかを説明する。

戦略: 火災発生後、避難のために使える時間（避難限界時間）は2~6分と考える。またその短い時間内に入居者全員を地上に避難させることは昼でも困難、夜は不可能と考える。地上への避難は消防隊に期待する。そのためには消防隊が来るまでに全員を「できるだけ安全な場所」に退避させ、消防隊に引き継ぐことが大切。「できるだけ安全な場所」は①バルコニー、②防火戸の向こう側、③階段直近の一定時間火や煙の流入を防げる部屋である。

戦術: 大きく以下の4つ。

1. 消防隊に早く来てもらうため、できるだけ早く消防に通報する。
2. 「安全な場所」へ入居者を早く退避させるため、そのとき施設にいる職員は全員火災階に集まる。
3. 避難限界時間を稼ぐため、戸を閉める・自然排煙口を開けるなどして火や煙の拡散を防ぐ。
4. バルコニーがある場合はバルコニーを活用する。

高齢者福祉施設の火災で理解すべきこと:

1. 火災は次第に大きくなる。一定時間を過ぎると急速に危険になる。
初めは必ず小さな火から始まる。やがて可燃物に着火して拡大し、内装や構造体、天井に着火し更に拡大、フラッシュオーバーとなる。窓ガラスが割れ出火室全体が火の海になり、隣の部屋（廊下など）に拡大して階全体へ、さらに上階に延焼し、建物全体の火災となる。このメカニズムを遅らせ、時間を稼いで消防隊を待つのが基本である。
2. 階段を使って全員避難させることは不可能。考えないほうが良い。
3. 臨機応変な対応は素人には無理。そのため、まずは、昼でも夜でも、訓練でも本当の火災であっても、基本方針や基本行動は同じにし、且つ単純化するほうが良い。

避難限界時間: 火災限界時間には次の二つがある。

火災室の避難限界時間：通常の高齢者福祉施設なら、家具などの可燃物が多ければ2分、普通の量なら3分、あまりなければ4分と考えて良い。

火災室以外の部分の避難限界時間：通常の高齢者福祉施設なら、廊下や戸のない部屋での出火なら火災室と同じ、戸がある居室で出火した場合は火災室の限界時間+2分と考えて良い。

夜間、職員が火災発生に気づいたときの対応：

1. **通報**：火災を発見したら、現場確認より先に消防に通報する。通報装置の押しボタンのみで通報し、電話で119番はしない（電話だと2～3分貴重な時間を削られるため）。2015年4月からは火災通報装置は自火報連動が義務付けられたが、それでも「押しボタンを押す」作業は行うこと。消防からの折り返しの確認電話は無視して良い。
2. **火災確認と火災階への職員参集**：自火報盤で出火位置を確認し、火災階職員に現場確認させる。夜間でも全館放送する。現場確認する職員は消火器を携帯する。また、火災初期対応には人手が必要なので、他階の職員も火災階に駆けつけ、分担して作業する。他階の職員が駆けつけるとき、階段室の扉を閉めて堅穴区画を形成する（夜間閉鎖が原則なら確認等不要）。
3. **初期消火と出火室の要救助者の救出、火煙閉じ込め**：初期消火は消火器のみ使用し、消火栓は使用しない。昼なら良いが、夜間は消火栓で消火するより火煙の閉じ込めを優先し、出火室の扉を閉めて火や煙を閉じ込める。これで廊下を使って活動する時間を一定時間確保できる。
4. **火災階の全居室のバルコニー側窓の解錠と、廊下側扉の閉鎖**：次に、出火室以外の居室の扉を閉める。その意図は、階段を使った避難はせず、バルコニーがあるなら、入居者を一度居室に留めた上で、状況を見て順次バルコニーに避難させていくため。このとき職員がバルコニー側の窓から居室に入り、バルコニーに入居者を出していくと危険が少なく避難誘導できる。しかしバルコニー側の窓が施錠されていると、窓から居室に入れないので、事前に窓を解錠しておく必要がある。よってすべての居室の扉を閉める際、同時にバルコニー側の窓を解錠しておくこと後々職員が活動しやすい。ただし自火報と連動して全居室のバルコニー側窓が解錠される or リモコン等でバルコニー側から解錠できる場合は、この段階では各居室の扉閉鎖のみで良い。
5. **廊下の排煙**：自然排煙口などで廊下の排煙を行う。火災室の次に危険になるのは、火災室が面する廊下などの共用部。そこで廊下に煙が充満するのを遅らせるため排煙し、廊下を使って活動できる時間を長くとれるようにする。
6. **入居者の避難管理**：騒ぎに気付いて廊下に出てくる入居者や、トイレなどに行っている入居者を自室に戻す。安否の確認や、消防隊に要救助者の位置を分かりやすくし早く救助してもらうため。
7. **水平避難**：いったん入居者を自室に留めて扉等で火煙から隔離した後、危険になった居室から順に、安全に退避でき且つ消防隊が救助しやすい場所に水平避難する。バルコニーがあればバルコニーがベスト、ない場合は階段附室や階段付近の「火煙の流入を一定時間防げる部屋」が次善策。バルコニーもこのような部屋もない場合は、遮煙性の高い扉を設けた部屋を作ることを考えるべき。廊下はいずれ煙で危険になるので、避難誘導時の廊下での活動時間はできるだけ短くし、バルコニー伝いに居室に進入・外に搬出すると良い（上記4. でバルコニー側窓を解錠するのはこのため）。階段を使った避難はしない。また階段附室の防火戸を閉め、上階への火煙拡大を遅らせる。

夜間出火を想定する場所：夜間想定なのにキッチンから出火と想定して訓練している施設が多いが、それは正しくない。統計上では、夜間キッチンで出火した火災は少なく、居室が多い。また意外に洗濯室からの出火も目立つ（ガス設備）。これらを想定して訓練してはどうか？また、放火は様々な

場所で発生しているのです、火気のない場所での火災を想定してもおかしくはない。

バルコニーがない施設の場合：上記のような居室籠城型の避難は危険が高い。防火戸の向こう側への水平避難で対処するべき。廊下に防火戸が設置されていなければ、簡易な遮煙スクリーンを設置することも検討してみてほしい。

大地震後の火災について：消防隊が多忙のため、消防隊に期待すべきではない。また SP も地震動で破損して性能発揮できない可能性もある。一方で地震に起因して火災が発生するのは殆ど昼で、火気を使用している or 使用していた場所からの出火であると思われる。そこでこのような時には、火気を使用し出火危険がある場所を予め決めておき、大地震発生直後に職員が見回ると良い。職員は複数人でチームを組んで、消火器を携帯しておけば、仮に出火していても迅速に対処できる。

4) 「火災を想定した図上演習ゲーム (FIG) の進め方」

(14:30~15:00) 日本防火技術者協会 富松 太基

FIG の位置付け：FIG は本来、自施設を舞台に行うもの。

また FIG は、FIG それだけで終わるのではなく、①FIG →②訓練計画作成→③訓練実施→④訓練の結果を反省し、計画へフィードバック、といった PDCA サイクルの中に組み入れると良い。FIG で上手くいったと思っても、実際に訓練で身体を動かしてみると上手くいかないこともあるので、それを反映して⑤訓練計画を修正→⑥訓練実施→⑦計画へフィードバック…とする。



準備物：平面図や入居者・職員・火元・煙の模型、また時間チャートを用意して火災対応時と火災が鎮火した後の復旧も考えて行うと良い。

人数と役割分担：10人程度でグループを作り、進行役、記録係、火と煙の役、入居者役、他のグループへの発表者を決める。また「ファシリテーター」を決める。ファシリテーターは進行管理役で、議論が詰まったときに別の観点を提示する、議論の中で見過ごされていたポイントを指摘するなどの役割を負う。ただし直接議論には参加せず、決定権はない(主役はあくまでグループメンバーである)。本日の FIG 演習では防火技術者協会メンバーが各班のファシリテーターを務める。

進め方：

条件の設定：まず出火の時期、時間帯、出火場所などの条件を決める。このとき「どんな条件の出火頻度が多いか」ではなく「どんな条件だったら被害が大きくなりやすいか(死傷者数が大きくなりやすいか)」を主眼に条件を考える。パターンは一つに限らないほうが良い。三パターンくらい考えることが好ましい。

避難限界時間：小林の講義であったように4~6分くらいを想定する。FIGでもそうだが、実際に訓練するときにも出しておく必要がある。また時間とともに煙が拡大し、活動できる範囲が狭くなっていくこともイメージする。

扉や窓の状態：普段どの扉が閉まっているか、またその施錠の有無はどうだったか、実際に近い状態をイメージして FIG や訓練をする。例えば各部屋からバルコニーに直に出れるようになっていても、その窓が施錠されていたら外から室内に入ることはできず、活動可能なエリアが狭くなる、そういったこともイメージして議論を進める。

職員のすべきこと：火災発生時に職員がすべきことは通報や初期消火，避難誘導の三つに大別されるが，少ない人数では短時間に全てこなせない。通報や初期消火は近年自動化されており，機械に期待もできるが，避難誘導は人しかできない。避難誘導をどのようにするかを中心に，FIGを進めてほしい。基本的な実施事項は小林の講義にあったように以下の六つ。

1. 火災の覚知（火源位置の確認・消防への通報・職員の火災階参集）
2. 火災室の要救助者の救出・初期消火・火煙の閉じ込め
3. 排煙設備の作動
4. トイレ等の検索（夜間でも必要）
5. 水平避難（バルコニーや階段付室，または階段近辺の比較的安全な部屋を利用）
6. 消防隊への引継ぎ

避難の時間の考え方：避難の時間は①出火から人が火災を覚知するまでの時間，②火災覚知してから行動開始するまでの時間，③入居者の部屋に到達するのにかかる時間，④入居者を介助して避難させる時間，⑤避難余裕時間，で構成される。②③④をまとめて避難所要時間という。③では移動はもちろん，その途中のドアを開け閉めしたり，排煙したり，④では介助に必要な車椅子や杖を準備したり，また避難以外では通報や初期消火や職員同士の連絡など，避難時間の間に職員がやることはかなり多い。何をどの順番で，どのようにやるか？をFIGで考えてみてほしい。

『避難限界時間>避難所要時間』を成立するには？：次の方法がある。

1. 避難限界時間を延ばす：①火・煙の発生速度・量を減らす（内装や収納物を燃えにくいものにする），②火・煙の広がるスピードを遅くする（戸を閉めて火煙を閉じ込める，避難路の内装や調度類を燃えにくいものにする），③煙が人の高さに落ちてくるスピードを遅くする（天井を高くする，排煙用の天窓をつけるなど）。
2. 避難所要時間を短縮する

記録の作成：配布した冊子に付録として付いているので活用してほしい。

FIGの結果の検証：FIGでやったことをそのままにせず，実際に訓練でやってみて確認してほしい。実際にやってみると意外なほど時間がかかる作業もある。検証のポイントは単純であること（臨機応変にはしない），統一すること（状況によって対応を分けない），そしてFIGや訓練も含め結果を施設内の全ての人で共有すること。これらの結果は管轄消防機関（通報の方法など）や，できれば消防以外の防火技術の専門家に意見を求めることが望ましい。

FIGの効果：施設固有の特徴を把握することができる，OJTでリーダーを育成することができる，自分たちだけで考えるのではなく消防機関など外部への相談を促進すること。

被災後の対応：消防は火災を鎮火するまでは対応してくれるが，その後は面倒見てくれない。罹災後入居者や自分たち職員含めどうするか，様々な時間軸で考えてみてほしい。

失敗から学ぶ：訓練は失敗してこそ学ぶことが多い。FIGや訓練では失敗を恐れずトライし，ただしなぜ失敗したかを考え，その次にフィードバックしていくと，継続した改善が可能になる。

5) FIGのグループワーク (15:10~16:20)

1~6の6つのグループに分かれワークショップを行った。

各班には長岡市消防職員が1~2名付きワークショップに参加した。防火技術者協会メンバーはファシリテーターとして各グループに参加した。

模型は黒のチェス駒(職員をイメージ, 各班3個), 白の人型模型(入居者をイメージ, 同30個), その他に火源と消火器, 煙の模型を用意した。



ワークショップには, いずれの班も3階建て特養施設(1階にデイサービス, 2・3階はそれぞれ3ユニットずつ配置)の1・2・3F平面図を用いた。職員数は基本的に各階に1名ずつとした。

6) グループ別報告 (16:20~16:40) ※発表順に記述

第5グループ(ファシリテーター:村井)

出火室は2Fの201号室。時刻は21:30(職員が巡回中)で, 出火原因は201号室入居者による隠れたタバコによる。職員体制は1F宿直室に1名, 2F・3Fに各2名ずつ(各階とも3ユニットのため)。

21:30に感知器が鳴動し, それと同時に201号室入居者が助けを求めに外に出てきた。

自火報が作動し, 1F当直者が受信盤で出火場所を確認する。非常ベルの音とともに全館放送が自動で入る。その間にすべての職員(5人)が出火元に消火器を持参して集合, 初期消火に当たる。初期消火に失敗すると同時に3F職員が3Fフロアに戻り, 職員3人で入居者の動揺に対応する。出火フロアでは利用者を避難誘導しながら各部屋の安否も確認する。

避難誘導の際は, 窓の開錠と戸締りを併せて行い, 完了した部屋の名札をひっくり返していく。またトイレやリネン室, その他共有スペースの確認も同時に行う。避難誘導は火元から遠い場所へ避難させる。3Fでも同様に実施する。避難が終わると同時に消防隊が到着, 消防隊に人員と不明の利用者の有無を報告し引き継ぐ。

質疑応答

- ・(富松) 3F入居者の見守りをする事とした理由は?→3Fで動揺している入居者がいると想定されたのでその見守りと, 煙の3Fへの流入を防ぐ措置をするため。
- ・(富松) 安全な場所とはどこを指すのか?→出火場所が201号室で, ユニット2とユニット3の間に区画があるため, ユニット3のバルコニーの非常階段付近とした。

第3グループ(ファシリテーター:小林)

夏季の深夜3:30頃, 2Fユニット3の306号室で出火したことを想定した。出火当時, 施設内には職員3名のみとした。

自火報によって火災を覚知, 各階の職員は各階に設けられた表示盤で出火場所を確認し, 消火器を持って2Fのユニット3に参集する。ただし1F宿直者のみ, 玄関を解錠してからユニット3に向かう。出火場所を探し, 初めて出火場所を知る。この時, 二人で306入居者を室外に救出し, 初期消火を行

う。一人はスタッフルームに戻り、通報装置のボタンを押し、全館放送をかける。初期消火に失敗した後も再度、ユニット3で出火したとユニット3の入居者をこれから避難誘導すること、他のユニット入居者はひとまずその場で待機するよう全館放送する。

306号室の扉を閉め、ユニット3の入居者を火点の近い部屋から順次誘導する。バルコニーに出る扉は、いくつかの例外を除き安全のため全開にならない想定としており、バルコニーに出られる扉の一つである喫煙所ホールにユニット3入居者を一時避難させることとした。ユニット3の避難が終わり次第他のユニットの見守りに回る。この時点で消防隊が現着するので、火災や避難の状況、出火ユニット入居者の一時避難場所や他のユニットの入居者は自室待機であることを消防隊に引継ぎ、終了した。

- ・(ファシリテーター補足) ワークショップ参加者に聞いたところ、バルコニーに直接出られない施設が多いようだったので、現実を反映した設定とした。職員数3人だと違反だということだったが、駒が三つしかないためとりあえず職員3名とした。

第1グループ (ファシリテーター：大西)

設定を難しくしてしまい、安全に避難する以前に消防隊が来るまでどう過ごすかを議論した。

出火時刻は深夜1時。3人体制で夜勤をしていて、1Fに宿直者がいない、さらに1人仮眠中と、常識的にはあまり無い状況を想定した。

出火場所は3Fユニット4内のリネン庫で、床面積が小さいため感知器が設置されていない。出火後、漏れ出た煙で庫外の感知器が発報、そのため出火から1分後に覚知したと想定した。

出火当時、職員Aは3Fユニット5に、職員Bは1Fで仮眠中、職員Cは2Fにいた。感知器が鳴ったと同時に3Fユニット5にいた職員Aが3Fステーションに駆けつける。仮眠を取っていた職員Bは自火報鳴動で目を覚まし、職員Cは自火報鳴動で2Fステーションに行き、出火場所を確認し、3Fへ移動する。3FにいたAが指示出しをする。

バルコニーに通じる窓は、平時ロックされているが、自火報鳴動で自動解錠されることにした。

Aはまず、Bに通報と館内放送を指示、Cにユニット間の扉閉鎖とユニット4、5内の排煙設備の作動を指示し、自身は初期消火に当たる。しかし初期消火できず、ここまで火災発生から3分経過。そこでAとCの二人で、ユニット4と5の各部屋の扉を閉めて回り、入居者の安否確認をする。その間Bは、通報と全館放送終了後、ユニット6の見守りをする。ここまでで出火から5分、消防隊が現着し、避難状況やバルコニー使用可能な窓の状況などを消防隊に引継ぎ、終了する。

第2グループ (ファシリテーター：富松)

出火時刻は深夜2時、2Fのユニット3の301号室から出火。当直者1名、2F・3F職員は1名ずつ。避難限界時間は火災室で4分、その他は6分とした。

自火報鳴動後、1F職員が当直室から事務室に移動して自火報盤を確認、出火場所を確認する。全館放送で301号室付近の火災発生の旨を全館放送する。2F職員が現場確認し、301号室入居者の安全な場所への移動、初期消火時に3F職員も駆けつけてきて、同時に消火に当たる。初期消火失敗。

そのまま302号室から避難誘導開始、一人がバルコニーへ302号室入居者を出し、もう一人は302号室から303、304、305…と順次(301号室で出火のため)各部屋のバルコニー側窓の解錠をして回る。302を避難誘導した職員がバルコニー伝いに外階段付近まで入居者を連れて行く、その間に1F当直者

も 2F に上がってくる。当直者か 3F 職員のどちらかが見守るとともに、303、304…と順次バルコニー側窓から室内に入り入居者をバルコニーに出していく。どこまでそれができるか…避難限界時間の 6 分以内なので、居室に残る人がいても仕方がない、あとは消防に任せる。

また同階の他の 2 ユニットは防火区画で区切られているので一切手が回っていない。しかし、わずか 6 分間に 3 人でできるのはそんなところと思う。

第 4 グループ（ファシリテーター：栗岡）

夜 22 時半ごろ、2F のユニット 1、102 号室で出火。102 号室の入居者が隠れて喫煙して出火したと想定した（夜 21 時以降は喫煙スペースが閉まってしまうため）。職員は各階一人ずつ、PHS を持っている。

出火後非常ベルが鳴り、1F 当直者が事務室に行き、自火報盤で出火場所を確認、通報ボタンを押す。その後 2F 職員に PHS で出火したことを連絡。2F 職員が電話後現場確認している間に、1F 当直者は 3F 職員に PHS で連絡、2F に応援に行くよう指示。連絡終わり次第 1F・3F 職員は 2F 火災現場へ向かう。2F 職員はその間に初期消火を行う。

初期消火失敗後、102 入居者をフロア側に出し、とりあえず 105 号室に避難させる。次に、火元の 102 号室の扉を閉めて火災による熱や煙を閉じ込め、1F と 3F 職員で、101、103 号室に入り、バルコニー側窓を解錠し廊下側の扉を閉め、入居者にはとりあえずその場にいてもらう。順次ユニット 1 の 110 号室まで同様に行う。その間、2F 職員は同一階の他のユニットとユニット 1 の間の防火扉を閉めて煙が広がらないように処置し、トイレ等も確認する。ここまでで 5 分。

職員たちはまた火元周辺の部屋へ戻り、101 や 103 の入居者をバルコニーに出す。その後消防隊が到着するまで、バルコニー側からできるだけ入居者を順次バルコニーに避難させていく。

第 6 グループ（ファシリテーター：山村）

1 月下旬、午前 2 時ごろ、2F 共用部分のリネン室から出火。職員は各階 1 名ずつ配置。

まず自火報が作動し、各階職員が消火器を持って 2F に移動。初期消火失敗し、職員一人は階段前の防火扉を閉め、もう一人と手分けして、火元に近いユニット 3 の入居者をバルコニーに避難誘導する。残る一人は熱と煙のユニット 1 への侵入を防止するためにユニット玄関を閉めた後、ユニット 1 各居室の扉を順次閉めて回る。バルコニーに出した入居者を職員二名で見守る中、消防隊の到着を待つ。

職員が 3 人しかいない中、避難の限界時間も 8 分しかなく、班員で話し合った結果、全員は不可能だができるだけ多くの入居者をバルコニーに出すことが最も良いとの結論に至った。

7) 講評・総括コメント (16:50~17:00)

日本防火技術者協会理事 東京理科大学大学院教授 小林 恭一

法規上は職員5名のところ3名で演習したため、かなり無理があったと思う。3名でやると出火ユニットの人を安全な場所に逃がすので精一杯であった。また第3グループでは、現実を反映してバルコニーが少ししか開かないと設定したために、避難の戦術を考えるのにとっても苦労していた。

逆に基準に則り職員5名とする、ユニット毎に防火区画されていると設定するなど、予めの条件が有利になると、避難戦術構築がどんどん楽になることもご理解いただけたと思う。

今回は神戸のある施設を舞台に FIG をさせていただいたが、施設に戻られたら皆さん各自の施設を舞台にして、職場の皆さんで FIG をやってみてほしい。現実の状況を設定し、入居者の顔を思い浮かべながら演習することで、より現実的・具体的にどうすべきか見えてくると思う。その中でベターな戦術を作り上げて行ってほしい。

今回は初期消火失敗する想定で実施したが、実際には SP があると火災抑制してくれる。しかし、だからといって何もしないでよいと捉えるのではなく、安心感を持って避難誘導ができるようになると捉えてほしい。

本日は取り上げなかったが、いったん火災が発生すると、消防隊が帰った後も大変になる。瞬時の判断は必要ではないが、焼けた部屋の入居者をどこに住ませるか?など、長期的な対応が求められる。非番の職員を招集する体制を作る、近隣の人との協力を求めるなど、より深く踏み込んで検討してみしてほしい。



以上